

教育(指し示し)にできることとできないこと

田中 怜 (筑波大学大学院/教育方法学)

ピノキオ

(原題: Pinocchio)

- ◆ 種別: DVD (映画)
- ◆ 監督: ベン・シャープスティーン/ハミルトン・ラスク
- ◆ 製作年: 1940年
- ◆ 製作国: アメリカ合衆国
- ◆ 発売/販売元: ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント
- ◆ 時間: 本編 88分
- ◆ 音声: 英語/日本語
- ◆ 字幕: 日本語/英語



ファウスト博士とメフィストフェレスの像
(2014年2月、Leipzigにて筆者撮影)

あらすじ

時計職人ゼペットは、ある夜に星に向かって人間の子どもが欲しいと願う。するとブルー・フェアリーがそれに応え、ゼペットが作った木の人形ピノキオに命を与える。ピノキオが本当の人間の子どもになるためには、人間としての正しい行いを学ばなければならない。

コオロギの「良心」ジミニー・クリケットに導かれながら、ピノキオは悪の誘惑を乗り越えて本当の人間の子どもになる。

シーン再現

ブルー・フェアリー: 勇気をもって生き、正直で優しければ、いつかは本当の子どもになれます。

ピノキオ: それ本当なの?

ジミニー・クリケット: 楽じゃないよ。

ブルー・フェアリー: 良いことと悪いことの区別を知るの。

Chapter

1. オープニング (♪星に願いを) / 2'22
2. 昔 ある夜のこと... / 3'15
3. ♪可愛い木の坊や / 5'17
4. ゼペットの願い / 3'54
5. 妖精 (ブルー・フェアリー) / 3'19
6. ♪困ったときには口笛を / 2'48
7. 届いた願い / 5'24
8. ピノキオ 学校へ / 1'51
9. 正直ジョンとギデオン / 1'56
10. 甘い言葉 (♪ハイ・ディドゥル・ディー・ディー) / 5'47
11. ♪もう糸はいらない / 4'24
12. 閉じこめられたピノキオ / 1'48
13. 嘘をつくとき... / 2'48
14. 恐ろしい計画 / 2'36
15. 再びだまされたピノキオ / 4'01
16. おもしろ島 (プレジャー・アイランド) / 1'42
17. 怒ったジミニー・クリケット / 4'09
18. ロバに変身 / 2'24
19. 悲しい知らせ / 2'24
20. 海の底 / 5'43
21. 目覚めた怪物クジラ (モンスター) / 2'09
22. お腹の中での再会 / 3'57
23. くしゃみで脱出 / 4'21
24. 本物の子供だ! / 3'06

本作品の基本的なストーリーラインは、以下の3点に要約可能である。①木の人形ピノキオは本当の人間になるために人としての正しさを学んでいく、②ピノキオに人としての正しさを教えるのは、コオロギの「良心」ジミニー・クリケットである、③ジミニーに助けられつつピノキオは、最終的に人間としての正しさを学び、本当の人間の子どもになる。

この極めてシンプルなストーリー構成は、一人の少年の心の成長である以前に、近代教育の理念そのものを表現している。「人間は教育によって人間になる」というカント的な命題を想起するまでもなく、近代教育の理念は、自律的な一自らの理性によって理解し、判断し、行為する一人間の形成にある。近代社会の中で教育は、人間の自然の蒙昧な状態と理性的な自己決定との間の橋渡しの機能を担わされていた。そうした眼差しからすれば、本作中で描かれているピノキオの成長とは、単なる木の人形から生身の人間への変容を意味しているのではない。むしろそれは、粗野で自己判断に欠ける「子ども」が、教育を媒介することによって、自らの理性の導きに従って行為する「人間」へと変わるその在り様を含意している。

その際に、ピノキオを「人間」へと教え導くのが、教師としてのジミニー・クリケットである。原作では名前すら与えられないこのキャラクターが、「良心」としてピノキオを指導する姿からは、近代教育の避けたい構造を読み取ることができる。その構造とは、他律によって自律を獲得するという近代教育の弁証法的性格のことである。人間の行為規範を主体の外部に具現化したジミニーという存在は、教育が他者を欠いては成立しえない営為であることを教えてくれている。

そのため、ピノキオが人間になる上でジミニーの役割は極めて重要なものといえる。しかしながら、果たしてピノキオが人間になったのはジミニーの直接的な働きかけによるものであったのだろうか。作中のジミニーの行為をよくよく観察してみれば、実のところ彼はピノキオに対して何もしていない。彼はピノキオに対して助言や援助を繰り返すが、ピノキオはそれをことごとく裏切って行為している。またピノキオが良心的に行為した場合も、その行為はジミニーによって直接的に導き出されたのではなく、種々の環境的な諸要因が重なって発生しているにすぎない。このことから、実のところジミニーがピノキオのあらゆる行為に対して、何の直接的な貢献もしていないことがわかる。

ジミニーの働きかけが直接的にピノキオの行為を促すに至っていない—これは作中におけるジミニーの役割の虚しさを物語っている。しかし教育という文脈から解釈すれば、それはおよそ次のことを示唆してもいる。すなわち、教師による教育的な働きかけとその結果としての子どもの行為との間の非連続性である。このことをドイツの一般教育学者ブランゲ (Klaus Prange) は、教育学における技術欠如として説明している。彼によれば、教育学には教育的行為の結果を保証するような技術 τέχνη (techne) が欠けている。そのため、例えば橋の倒壊の責任を、それを造った石工に

負わせることはできるが、しかし教育の失敗（あるいは成功）の理由を、教師に帰属させることはできない。なぜなら、世の中には壊れない橋を造るための確かな技術や知識は存在するが、しかし一方で、教育学の中には「教育的行為にとっての普遍的な知識というものはない」からである。教師の働きかけとその結果の間には、技術欠如による埋めがたい溝が横たわっている。

しかし如何に教育学が技術欠如だったとしても、教師が働きかけを止めることはできない。また、たとえ玉突き的に学習が生起することがなかったとしても、教師の働きかけそれ自体が無意味である、ということにもならない。プランゲの表現を借りれば、教師は教育的行為としての「指し示し」(Zeigen) を放棄することはできない。例えば、横断歩道で父親は子どもに赤信号を「指し示す」し、母親は食卓でナイフとフォークの使い方を模範によって「指し示す」。「指し示し」とは、日常の何気ない場面から特殊な教育状況にまで見出すことのできる、あらゆる教育行為に内在する基礎形式(注1)である。

もちろん父親が子どもに赤信号を伝えても、子どもは道路に飛び出すかもしれない。また母親がナイフとフォークの使い方をデモンストレーションしても、子どもは正しく使わないどころか、実のところ母親の背中越しに見えるテレビ番組にくぎ付けになっているだけなのかもしれない。「指し示し」はその結果である子どもの行為を保証することはない。しかし、教育が子どもを無知から知へ、不可能から可能へ、無意志から意志へと移行させようとする営為である限り、教育者は「指し示し」を放棄することはできない。本作におけるジミニーの振る舞いを振り返ってみれば、彼はピノキオの行為に直接的に影響を及ぼしていたわけではなかった。しかし彼はピノキオに対して、教師として常に「指し示し」していた。

もちろんこうしたジミニーの行為は、教育という営みの在り様が記述されたに過ぎないのであって、そこからいかなる価値判断をも導き出すことはできない。「指し示し」はあくまで教育行為の基礎形式なのであって、「悪い」「誤った」教育から「良い」教育を区別するものではない(注2)。さらに本稿では既に以下のことを確認した。①教育学は技術欠如である、②教育学が技術欠如である限り、働きかけと結果の因果的結合は期待できない、③そのため、教育者は子どもを「指し示す」ことはできるが、彼に教育の結果の責任を帰属させることはできない。—以上のような見地からすれば、映画「ピノキオ」のハッピーエンドを、ジミニーの働きかけの必然的結果として片づけることはできない。なぜなら、ジミニーの働きかけが功を奏さず、例えば、ピノキオがロバの状態で馬車屋に売り飛ばされていた可能性は十分想定できるからである。

このように、本作品は、近代教育の背負った宿命的構造を、教師ジミニーを通して映し出してくれている。近代教育は学問的欠損を抱えながらも、教師の「指し示し」によって確実性と不確実性の間、成功と失敗の間、可能性と限界の間を綱渡りしている。結果が必ずしもハッピーエンドにならないことは、もちろん残念であろう(注3)。しかし、もし教育の結果がハッピーエンドであるべき、との規範命題を志向するならば、それは教育がどうあるのか、との事実命題に支えられてこそ学的説得性を有するであろう。そして近代教育がどうあるのか、との事実命題を教えてくれるのが、映画「ピノキオ」であり、そこに

登場する小さな「良心」に他ならない。

【注】

(注1) 人を教育する際の振る舞い、すなわち教育行為を表す表現は多様である。例えば教える (lehren)、戒める (ermahnen)、教授する (unterricht)、指導する (anleiten)、褒める (loben)、なだめる (beruhigen)、励ます (anspornen) 等々。こうした多様な教育行為の表現に対してプラングは疑義を呈する。すなわち教育行為が相互に無秩序に乱立されることによって、「教育任務の概念的な核はいろいろな形のかかわりの実践の中に姿を消す」(Prange 2005, S.61-62) ことになってしまう。そのためプラングは「ぼやけていく一般性」を回避するために、「[教育行為の] 縮減という反対の道を選択」し、「最低限与えられなければならないことを際立たせる」(Prange 2005, S.65 括弧内は引用者)。つまりあらゆる教育行為に共通するひとつの基礎形式を設定する。それが「指し示し」(Zeigen) である。

(注2) ところが、作中におけるジミニーの姿はしばしば美德として語られることがある。つまりブルー・フェアリーから「良心」の役目を授かったジミニーは、不器用で不完全ではあっても、最後までピノキオに働き続け、最後には努力が報われて見事「金のバッジ」を受け取る。そうしたジミニーの姿勢は、熱心で努力家で決して諦めない教師の理想像と重ね合わされて評価される。このようなジミニー評の背後にあるのは、まさに「聖ペスタロッツ」(プラング) に象徴されるような、教師の「徳のカテゴリー」にその存在意義を見出す考え方である。

(注3) もちろんそれが裏を返せば教育という営為が継続され、考究され続ける理由でもあるのだが。

【参考文献】

- ・ Kant, I., Über Pädagogik, Königsberg, 1803. (勝田守一／伊勢田耀子訳『教育学講義他』、明治図書出版、2000年)
- ・ Meyer, H., Unterrichtsmethoden, I: Theorieband, Cornelsen Verlag Scriptor, 1987. (原田信之／寺尾慎一訳『実践学としての授業方法学』、北大路書房、1998年)
- ・ Prange, K., Plädoyer für Erziehung, Schneider Verlag Hohengehren, 2000.
- ・ Prange, K., Die Zeigestruktur der Erziehung, Grundriss der Operativen Pädagogik, Ferdinand Schöningh, 2005.